

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編

『「地域歴史遺産」の可能性』

岩田書院 二〇一三・七刊

A5 四九二頁 四八〇〇円

本書は、神戸大学大学院人文学研究室地域連携センターが、地域歴史文化に関するこの一〇年間の取り組みを、体験談も踏まえつつ、直面した課題、得られた成果などについてまとめた論考約三〇編を収めたものである。序章「地域歴史遺産という可能性」、第Ⅰ部「地域社会の変容と「地域歴史遺産」、第Ⅱ部「地域歴史資料学」の広がり」、第Ⅲ部「地域歴史遺産」「地域歴史資料学」を担う人びと」、終章「地域歴史遺産と地域連携活動」といった内容で構成される。地域連携センターの活動の広がり、大きな成果を一覧できる。

本書では「地域歴史遺産」という見方を提示する。「地域歴史遺産」という考え方は、「地域に残された、様々な歴史を明らかにする様々な素材と、それを地域の中で活用し、次の世代へと引き継いでいく人のあり方が、強く結びついている」ところに大きな眼目があるとし、歴史資料の性質に注目するというよりは、「残された「もの」をめぐる人と人との持続的な関係に注目する」概念であるという。既存の（指定文化財を中心とする）文化財行政を乗り越えようとする意図も見え、極めて画期的な概念である。しかも、「単なる地域の歴史の掘り起こしにとどまらない」概念だという。

地震や水害などの自然災害、人口問題（過疎化・流動化・少子高齢化）、ライフスタイルの変化、専門職員問題、コミュニティの変化、歴史・文化に対する意識の変化など、地域に残される歴史資料・文化財を取り巻く現代社会の諸問題に注目する点に、本書の大きな特色がある。現代社会の変化、地域文化の担い手にも目配りをして、研究者や行政職員が地域と如何に向き合い、地域の人々とともに考え、地域の歴史・文化を次世代に如何に守り伝えていくか、また担い手を育んでいくための方法（体制づくり）や事例が様々に紹介されている。もちろん、兵庫県下の取り組みを一樣にモデル化できるわけではないが、地域で文化財行政に携わる者として、共感できるような、逆に耳が痛いような、さらには目から鱗が落ちるような、そんな話がたくさん詰まっている。地域の歴史資料や文化（財）も、今まさに現代社会の中に存在し生きている、改めてそのような認識を起こさせてくれる。

しかし、本書全体がアーカイブ中心となっている点に若干物足りなさを感じる。対象とする資料により、（例えば仏像や民俗など）抱える問題群も多少異なってくるだろう。そういった面で、本書が文献史学を専門とする人にしか読まれないとしたら残念である。アーカイブも「地域歴史遺産」を考えるごく一部だろう。ただ、地域との関わりかたという点では、美術史・考古学・民俗学、建築史学・社会学などを専門としている人にとっても、益するところは極めて大きいと思う。今後、学際的に「地域歴史遺産」という概念がさらに深まり、各地で実践例が増えていくことを期待したい。そのためにも、地域の文化（財）に関わる人には、どのよ

うな分野を専門とするにせよ、是非とも一読をお勧めしたい。いや、読まなくてはならない一書だろう。

(坂本亮太)